

私は、1941年に旧満州の大連市で生まれた。父が南満州鉄道（通称＝満鉄）に務めていたからである。中国残留孤児問題がクローズアップされた時、中国に残されたのは、私と同年代の人が多くを知り、関心を持たざるを得なかった。右も左も分からない子どもたちが取り残され、どれほど苦勞をしただろう。親を恋しく思っただろうかと、胸が痛んだ。その後、満州開拓団の悲劇を伝え聞いた。私の家族は、日本に近い大連の港町にいたので、敗戦後は苦勞したけれども、無事に帰国できた。満州開拓団に興味を持ち、『中国農民が証す満州開拓の実相』を読んだ。ある人にお貸したら、奥さんから「夫は涙を流して読んでいました」と言われた。涙なくしては読めない実態が報告されている。

今年の1月に、石浜みかる氏が『証言・満州キリスト教開拓村 国策移民連合の果てに』を上梓している。「帯」には「慟哭 知られざる日本キリスト教史がここに！」と書かれていた。満州開拓団にキリスト教界も関わっていたことは、聞いていたが、その実相を知りたいと読んでみた。石浜氏は、資料を克明に調べあげ、多くの証言を集めている。

1932年、中国東北部に、愛新覚羅溥儀を執政に立て、満州国が建国された。関東軍が実質支配する、日本の傀儡国家であった。日本、ドイツ、イタリアの国土合計より、広い国土であった。日本人、漢人、朝鮮人、満州人、蒙古人の「五族共和」と言い、「王道楽土」を目指すと言いくるめ、植民地支配を正当化した。日本は「満州国」を食糧の調達と国家防衛の目的で、生命線として、重要視した。日本人100万人の移民を計画し、農民に10町歩の農地を与えると移民を煽り、強要した。農地は、現地住民から格安な購入もあったが、理不尽に奪い取ることも横行した。入植したのは27万人ほどで、現地住民との軋轢もあり、「楽土」とはほど遠いものであった。開拓団の戦後は耐え難い悲劇で、守るべき関東軍はいなく、成人男子は徴兵され、老人と女性と子どもだけが残された。中国人から略奪され、日ソ不可侵条約を破棄して、南下して来た凶暴なソ連兵の重火器と暴力に追われ、地獄の逃避行を強いられた。8万人が死んでいる。2022年に、平井美帆氏が『ソ連兵に差し出された娘たち』を著している。ソ連兵に娘たちを「接待」として差し出し、村民はどうやら帰国できたが、開拓団の傷は癒し難く残った。日本政府の移民は棄民であった。

賀川豊彦氏は平和主義者で、福祉、労働、教育問題など、貧しく苦勞している人々のために力を尽くし、また多くの著作で人々を励まし、世界に知られたキリスト者である。彼は戦時中、特高に常に見張られ、拘束もされてもいる。賀川氏は、1938年に満鉄に招かれ、大連に渡った。私の父はこの時、講演会に行ったのか、「賀川豊彦の講演を聞いたことがある」と言っていた。賀川氏は満州各地を案内され、随筆「ハルピンだより」には、「今の耕地は約日本の二倍弱千三百万町歩、これから日本人が開墾する所が、千万町歩と聞く。之に協同組合を発展させることができれば万々歳である」と書き、「身辺雑記」には、「理想的な植民地だと思った」と記している。石浜氏は「農地取得と拡大で現地民と対立し、抗争を体験するなかで百数十人の離団者が出たことを知らなかったのだろうか」と、賀川氏の言葉に疑問を呈している。現満州拓殖公司総裁の坪上貞一氏は賀川氏に「世界の植民史をみるに、キリスト教信仰に基づく植民は成功する。経済一点ばりの者はだめ。一つキリスト教村を満州移民村の模範としたいものだ」と語ったと言う。「満州基督教開拓村委員会」が設置され、賀川氏が委員長に選ばれた。以降は、開拓団の悲劇をなぞったことは自明である。キリスト者たちも、植民地支配の悲劇を見通す視点を失い、国家の要請に従い、「負」の歴史に加担したということである。